



## 父の舵を握る

青山学院高等部 1年 座間耀永

癌は父の夢を奪った。コーチとして子供達にヨットを普及するという夢が潰れた父。二十キロ以上も痩せ、流動食の日々。私は、父の「自然と対峙することが大切」という教えに従い、小三からヨットを習っている。ヨットは風や潮を見誤ると命を落とす危険がある。

だが、私は運動が苦手。ヨットは最初は正直苦痛だった。唯一の楽しみは、年に一回の障害のある方達とのレースだけであった。真剣勝負の中で障害をもとめせず立ち向かっていく彼らに会場が沸く。東京パラリンピックからセーリング競技が外された時は、ヨットの知名度の低さに憤りを覚えたほどだ。

癌宣告前、父の初ジュニア生徒として私は仲間と共に試験を受けた。技量が追いつかず、全員が補講になったが励まし合つて何とか合格。上級資格は本拠地カナダで取得しようと皆が沸いたが、私はもうこりこりだった。しかし、父の再発が分かり私は葛藤した。父のために苦手なヨットを続けるべきなのかどうか。そんな時、子供教室からコーチを頼まれた。私よりすばしっこい子供達を指導できるのか、と緊張した。一緒にコーチをした同級生のSは、きびきびしていて私は出る幕がなかった。練習後、「来てくれて助かった。」と駆け寄って下さるママがいた。

私は「Sと違って頼りないし。」と項垂れると、「何をいつているの！二人が違う性格だからいいんじゃない。うちの子は貴方を頼りにしているのよ。」私はびつくりした。うるつときた。その時、何か、父がやりたいことが見えた気がした。

夏。単身カナダに飛んだ。過酷な洋上一週間を経て、現地合流した仲間と悲願の資格を取得。今は、国家試験に臨んでいる。声が出ない父の目が嬉しそうにこちらを見ているのを感じる。父の域に達するには、経験も含めてまだ何年もかかる。そこまですべて父が生きている保障もない。だが、父の思いを私は「繋ぐ」ことを決意した。

自分の船。出航。今度は私が舵を切る番だ。

(審査評)冒頭の一文から最後の一行まで、緊張感が途切れる箇所がありませんでした。それでいて、途中に「がんばれ！」と力こぶしを握る。「つらいだろうねえ」と背中にと手を置きたくなる箇所がある。感情の起伏、絶望、不安、葛藤、歓喜などの舵を上手に取りながら、最後には自分の船出へと導いている。巧みな筆致です。しかし、この文章は、彼女一人で書き上げたものではありません。コーチ、友人、お母さん、そして大きな心で作者を見つめる父親の海ほど広い愛情が彼女のペンの航海に参加しています。おめでとう。さらなる広い海をめざせ！

ひきたよしあき